第一回研究実践奨励賞

◆受賞のことば◆

子どもがいても学びを諦めないで、と言える大学に

森開 こゆき
（コミュニティ政策学科 2014 年卒業）

この度は名誉ある賞を頂きまして、誠にありがとうございました。大変光栄に存じております。本論文には多くの皆様にご理解とご協力を頂きました。この場を借りて御礼申し上げます。

この論文を執筆する２年前、東日本大震災が起こりました。大学では震災の復興支援グループができたり、詳しくは知りませんが復興支援のための資金が多く捻出されていたりしたと伺いました。立教大学は社会貢献する大学なのだと改めて感心しました。

しかしそれと同時に、そんな遠くばかり見ていないで、という思いもありました。家族を幸せにできない人は世界平和も実現できないとはよく言われます。震災に遭われた方々の傷は計り知れません。しかし、あまり表沙汰にはなりませんが、身近な大学内には中絶を経験した学生がいる、子どもがいながら学校に通う学生がいる。彼女らの心の葛藤や苦労は見過ごすわけにはいきません。また、見て見ぬふりも許されません。当事者が声を挙げづらいことです。故に、新座キャンパスの託児所設置の実現もなかなか叶わずにいました。卒業論文を機に、大学に潜むこの問題に取り組もうと思いました。

こんな状況にある仲間にスポットライトを当てられたのは、自分自身が妊娠、出産をした経験があったからに他なりません。“私が大変なんだから助けてよ！”とある意味で強欲的な動機があったのは否めませんが、その強欲さが、声を挙げるというかたちになって、大学に託児所をつくって頂くきっかけになったのも事実です。自分の力量を超えていると思いつつも、それを諦めずに声を挙げることの重要性を身を持って学びました。また、こんな一学生の声を聞いてくれる大学がどれ程あるでしょうか。福祉に理解があるということもあると思いますが、学生と教授、職員の距離が近いのだと改めて感じました。

立教大学は変革し続けることのできる、その素質のある大学です。社会的な評価を気にして遠くばかりを見ず、また表面ばかりを繕うこともせず、常に本当に困っている人に対して誠実であり続けてほしいと願っています。人種や障がいの有無など関係なく、学びたいと思うあらゆる人々が学べる環境が、今とても求められているように思います。妊娠中、育児中の人々にとっても同じことが言えます。子どもがいても、学びを諦めることのない、大学内にベビーカーを押すママ学生がいても違和感がない、そんな立教大学が実現する日を、楽しみにしています。